

## 『日本神話における神婚説話の一考察』

— 水霊信仰を中心に —

児島由紀

一

『神婚説話』とは、神と神、または神と人という、片方の配偶者が『神』である婚姻譚のことである。こうした『神婚説話』は世界各地に見受けられるが、ここでは主に神と人との婚姻譚に着目してみた。

日本神話において、神と人との婚姻譚には三輪山説話、加茂説話などが挙げられる。そしてこれらの説話を伺ってみると、人の許へ訪れる神はある一つの性格を有している場合が非常に多い。

その神の性格とは、水を司るといふ『水霊』『水神』と言ったものである。

水を司る神は古くから日本人にとって、並々ならぬ対象であつたらしい。神話の中には勿論のことであるが、後世に伝わる数々の伝説や説話の中にも雷神、蛇神、竜神など水に係わりの深い神々が登場している。

何故、これほどまでに水を司る神々は人々の心を支配し続けたのか。それが何故、『神婚』という形態と結び付く

に至ったのか。

それらを現存する祭事儀礼、記紀神話を初めとする説話の中における神の性質、などから根本となる思想を検討し、水を司る神に対する信仰を考えてみたい。

二

先ず、祭事における儀礼についてであるが、これには神婚の儀礼と推察出来るものが多々存在する。

賀茂の御阿礼神事、各地に残る御田植祭などがそれである。

賀茂も御阿礼神事における神婚儀礼は秘儀として扱われていたせいか、齋院が廃絶した後は絶えてしまった。どのような形で行なわれていたのかは、全く不明である。だが齋院を勤めた式子内親王が詠んだ和歌などの断片から察すると、神の子供を「生れ」させる『神婚』の儀礼であったことには間違いないようだ。

各地に残る御田植祭の場合は、あきらかに豊年の予祝行事として執り行なわれている。

この時、迎えられる神は田植えの季節ということから、水の神霊であることが推測出来る。田植えをするにあたって、水は不可欠だからだ。

そしてその神を迎えるのは、女性だ。

神を迎える女性は未婚の女性である場合が多いが、こうした女性の他にお腹の大きな女性が登場する場合もある。恐らく、彼女の胎内に宿っているのは、神の子供であろう。この神の子供は来年の豊作を約束する新しい神である。

賀茂の御阿礼神事も、かつては豊年の予祝行事であった可能性がある。

それにしても何故、豊年を祈る祭で『神婚』という儀式を行わなくてはならなかったのだろうか。『神婚』を行なう源流になったであろう古代人の思想とは、どのようなものであったのか。

古代の人々にとって神とは、自然そのものであった。自然の力こそが神の呪力そのものであり、恵みをもたらすものであった。その恵みを得る為には、神の呪力を示現させ、自分達のものとして活用しなければならぬ。その為の手段として行なわれたのが、『神婚』であった。

『神婚』を行なう場合には、神を迎える者が必要となる。つまり神と婚姻する相手である。これが巫覡といった存在だ。巫覡という存在は祭政一致を基本としていた古代において、特別な存在であったことは間違いない。

巫覡の存在こそが、神の呪力を得ることにつながるのである。記紀神話を伺うと、巫覡の性格を有する登場人物が、神と婚姻を結んでいる場合が多い。

恐らく、古代の人々にとって水を司る神は特別な呪力を持つ神として捉えられていたのではあるまいか。そして人々はこの神の呪力を『神婚』によって得ようとしていたのではないか。

それほどまでに欲された神の呪力とは、如何なるものであったのだろうか。

### 三

水を司る神は様々な性質を内在させている。

第一に『豊穰』をもたらずという性質、第二に『死』と『再生』に纏わる性質である。

人々はこうした神の性質を『恐れ』、そして『畏れ』た。

神婚説話の中で水を司る神が人間と結婚する場合、相手の『人間』には『穀物霊』とも言うべき姿が伺える時がある。言うまでもなく『穀物霊』はアマテラスとニギの関係に見られるように『太陽神』の子孫とされ、太陽と密接な関わりを持っているとされていた。

そもそも『豊穰』とは、水と穀物と太陽が結び付いて始めて約束される自然の理であると言える。

こうした自然の理の中で、『水』を司る神は天上の『太陽』の神から、地上へ『穀物』の神を運ぶ媒体のような存在として捉えられていたのではないかという可能性が考えられる。水の神霊に天と地の神霊の両方の性格が見られるのは、その為なのではないだろうか。もし、そうであれば、豊穰を願う人々にとって、水の神霊とは不可欠な存在であったことは間違いない。

また水は『死』と『再生』という思想に大きく関与している。それらは説話の中だけでなく、信仰の儀式の中にも見て取れる。

例えば、あの世とこの世にあるという河。三途の河やギリシャ神話のレテ河など。信仰儀式においてはキリスト教の洗礼の儀式。神道の禊もそうであろう。記紀神話の中で、イザナギは死者の国である黄泉国から帰って来た時に、禊を行なっている。ケガレを祓う為であったことは言うまでもないが、死の国から帰還したということから、再生の儀式であったことも充分考えられる。

このように『水』が死と再生に結び付けられたことには、様々な要因があるのだろう。例えて挙げるならば、妊娠

している母胎を挙げてみたい。胎児は母親の胎内にある時、羊水の中で育ってゆく。命は水の中で育まれるのである。恐らく、『水』とは生命を生み出す根源とも考えられていたのではないだろうか。そしてそれ故に世界を存続させる力を持つと考えられた。

だからこそ人々は水の神霊に対し、「恐れ」を抱き、また「畏れた」のだろう。

こうした水の神霊への「オソレ」の観念は、後世に至るまで受け継がれた。死後、『雷神』になったという菅原道真に見るような御霊信仰などは良い例であると言えよう。様々な昔話や伝説の中にも、水の神霊は姿を変えて現れる。水に関わる神は、古代から人々にとって重要な信仰の対象になり得る存在であったことは間違いないだろう。

#### 四

以上、水の神霊について見てきたが、この神と結婚する『神婚説話』には、何故かタブーが付き纏う。そのタブーは、神が人間に課すのであるが、人間は必ずと言って良い程、タブーを破ってしまう。

神婚で課せられるタブーの内容は、『覗き見』という行為が特に重要視されているようだ。こうした『覗き見』に纏わる神婚説話は世界中に見ることが出来るのであるが、ここで疑問に思うのは「何故、見てはならぬ」ということなのか。「見てはならぬ」という神の姿とは、一体、何なのだろうか。

神の姿ということに関し、記紀神話の中で三輪山説話を例に挙げると、三輪山の神には三つの姿を伺うことが出来る。

一つは正体のはっきりしない神、蛇体の神、丹塗り矢の神である。この内、蛇体の神が現れる神話では、『覗き見』のタブーを破ったことでモモソヒメは死ぬことになる。

こうした神の姿の違いは、歴史の流れにおける思想変化もさることながら、人間の神に対する見方にもある。例えば蛇を水の神として捉える信仰には、大陸からの竜蛇信仰、そして古代人が抱いていたであろう蛇の生息への畏怖という、二つの源流を考えることが出来る。神の姿とは、人の求めに応じて変わり行くものであるらしい。そうした神の正体こそが、神の呪力として捉えられていたのではないだろうか。

祭政一致を基本とする古代の人々は、己の手から神の呪力が失われることを最も恐れた。だからこそ呪力の消失を避ける為に、タブーを設けた。特に豊穡と死と再生に関わる水の神の呪力を失うことは避けなければならないことだった。『覗き見』によるタブーは、見ることによって神は呪力を失うと考えられていたからではないだろうか。

よって『神婚』の儀礼において、『覗き見』ることは嚴重に禁じられていたものと思われる。

『神婚』とは神の呪力をこの世に示現させ、なおかつ確保する為に行なわれていたのだろう。『覗き見』ることによって、失われてはならない。

『神婚』の対象となる神が、水に関わる神であった場合は、尚更だったかも知れない。

水の神の呪力とは大地に豊穡をもたらすだけでなく、死と再生という生命のサイクルそのものにも関わる。ひいては世界の存続そのものに関わる。故にどの『神』よりもその呪力が「恐れ」られ、「畏れ」られていただろう。

つまり水に宿る『神』とは、まさに『人』にとって、決して失ってはならぬ『生命』であり、存続させねばならない『世界』そのものだったのである。

## 【参考文献】

- 一 「古事記・祝詞」 日本古典文学大系 岩波書店（一九五八） 倉野憲司・武田祐吉校註
- 二 「日本書紀 上」 岩波書店（一九五七） 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校註
- 三 「風土記」 岩波書店（一九五八） 秋本吉郎校註
- 四 「日本靈異記」 日本古典文学全集 小学館（昭和五〇） 中田祝夫校註・訳
- 五 「宇治拾遺物語」 日本古典文学全集 小学館（昭和四八） 小林智昭校註
- 六 「律・令」 日本思想大系新装版 岩波書店（一九七六） 井上光貞・関 晃・土田直鎮・青木和夫校註
- 七 「新古今和歌集」 日本古典文学全集 小学館（昭和四九） 峯村文人校註
- 八 「神道大系」 神社編一 賀茂」（「瀬見の小河」 伴信友） 神道大系編纂会編・発行（昭和五〇）
- 九 「神道大系」 神社編一 河内・和泉・摂津」（「住吉神代記」） 神道大系編纂会編・発行（昭和五十六）
- 一〇 「神道大系」 古典編一 新撰姓氏録」 神道大系編纂会編・発行（昭和五十六）
- 一一 「神道大系」 古典編一 延喜式（上）」 神道大系編纂会編・発行（平成三）
- 一二 「神道大系」 古典注釈編一 延喜式神名帳」 神道大系編纂会編・発行（昭和六十一）
- 十三 「賀茂注進雑記（「續々群書類従 第一神祇部」）」 統群書類従完成会（昭和四十五） 図書刊行会編
- 十四 「本朝月令（「群書類従第六輯 律令部・公事部」）」 統群書類従完成会（昭和七） 塙 保己一編
- 十五 「日本の神々」 神社と聖地一 第一卷 九州」 白水社（一九八四） 谷川健一編
- 一六 「日本の神々」 神社と聖地一 第四卷 大和」 白水社（一九八五） 谷川健一編
- 一七 「日本の神々」 神社と聖地一 第五卷 山城・近江」 白水社（一九八六） 谷川健一編
- 一八 「日本神話の研究 第三卷」 培風堂（一九五五） 松村武雄
- 一九 「日本神話の研究 第四卷」 培風堂（一九五八） 松村武雄
- 二〇 「日本神話Ⅰ」 有精堂（一九七〇） 日本文学研究資料叢書 日本文学研究資料刊行会編
- 二一 「日本神話Ⅱ」 有精堂（昭和五十二） 日本文学研究資料叢書 日本文学研究資料刊行会編

- 二二「柳田國男全集 第一卷」 筑摩書房（一九九〇） 柳田國男
- 二三「神話と歴史の間」 大明堂（昭和五十二） 肥後和男
- 二四「日本神話の謎」 大和書房（一九八五） 松前 健
- 二五「大和朝廷と日本神話」 雄山閣（昭和六十二） 松前 健
- 二六「古代伝承と宮廷祭祀」 塙書房（一九七四） 松前 健
- 二七「日本の神々」 中央公論社（一九七四） 松前 健
- 二八「稲荷明神―正一位の実像―」 筑摩書房（一九八八） 松前 健編
- 二九「日本神話の形成」 塙書房（一九七〇） 松前 健
- 三〇「日本の神話と古代信仰」 大和書房（一九九二） 松前 健
- 三一「日本神話と古代生活」 有精堂（一九七〇） 松前 健
- 三二「出雲神話」 講談社（昭和五二） 松前 健
- 三三「桃太郎の母」 講談社（一九八四） 石田英一郎
- 三四「神話の話」 講談社（一九七九） 大林太良
- 三五「建国神話の諸問題」 平凡社（昭和四十六） 三品彰英
- 三六「日鮮神話伝説の諸問題」 平凡社（一九七二） 三品彰英
- 三七「蛇神信仰論序説」 新泉社（一九八六） 阿部真司
- 三八「日本神話」 中央公論社（一九七〇） 上田正昭
- 三九「日本の神々」 講談社（一九八二） 平野仁啓
- 四〇「日本の死生観」 講談社（一九八二） 吉野裕子
- 四一「農耕儀礼の研究」 弘文堂（昭和四五） 小野重朗
- 四二「日本史辞典」 角川書店（昭和四一） 高柳光寿・竹内理三編
- 四三「古事記・日本書紀 総覧」 新人物往来社（平成二） 上田正昭編著



- 四四「神話・伝説 総覧」 新人物往来社（平成五） 宮田 登編著
- 四五「日本民俗芸能事典」 第一法規（昭和五十二） 日本ナショナル・トラスト編
- 四六「アジア稲作民の民俗と芸能」 雄山閣（平成六） 諏訪春雄・川村 湊編
- 四七「神話のイメージ」 大修館書店（一九九二） ジョゼフ・キャンベル著 青木義孝・中名生登美子・山下圭一郎訳
- 四八「イメージとシンボル（エリアード著作集四）」 せりか書房（一九七四） ミルチャ・エリアード著 前田耕作訳
- 四九「田植歌謡と儀礼の研究」 三弥井書店（昭和四八） 渡邊昭五
- 五〇「田植草子歌謡全考注」 桜楓社（昭和四九） 眞鍋昌弘
- 五一「中国の民間信仰」 工作社（一九八二） 澤田瑞穂
- 五二「カミとシャーマンと芸能」 八重岳書房（昭和五十九） 下野敏見
- 五三「御阿礼神事（「神道史研究八一二）」 座田 司
- 五四「大神神社の創祀（「神道史学研究 三五一一）」（昭和六十二） 田中 卓
- 五五「神と祭（「神道学研究 第十三號）」（昭和三十二） 座田 司
- 五六「阿蘇祭の田植祭（「神道学研究 第二十七號）」（昭和三十五） 杉本尚雄
- 五七「賀茂の斎院（「神道学研究 第四十四號）」（昭和四〇） 赤木志津子
- 五八「出雲の神と大和の神（「神道学研究 第一四〇號）」（平成元） 池田源太
- 五九「竜神の去来（「日本民俗学研究 二十六号）」（昭和三十七） 小野十朗
- 六〇「説話の文学的形成—三輪山説話を中心として—（「説話文学研究 三号）」（昭和四十四） 久松潜一
- 六一「インドの神々」 吉川弘文館（昭和六十二） 斎藤昭俊
- 六二「百練抄」新訂増補國史大系 吉川弘文館（一九七九） 黒板勝美・國史大系編集會編